

文・川口成彦

現代の楽器と古楽器が共存している今日において、我々は再現芸術の再現手段として様々な選択肢を持っています。バロック音楽の演奏のアンサンブルにおいて、モダン楽器に混ざってチェンバロが使われることが今日では一般的ですが、そのような「モダン楽器と古楽器の折衷式再現法」にフォルテピアノも使用されることが増えてきました。

このたびの吉井瑞穂さんのモダンオーボエとの共演では、チェンバロと1790年頃のルイ・デュルケンのピアノの復元楽器を用いて、ドイツ、フランス、スペインの18世紀の作品を演奏します。

ドイツの作品では、「音楽の父」、J.S.バッハ（1685-1750）と、彼の次男 C.P.E. バッハ（1714-1788）が登場します。第2楽章「シチリアーノ」が有名な J.S. バッハの BWV1031 のソナタは、優美でギャラントな雰囲気も持ち合わせていることから、彼の真作であるか疑問視されており、C.P.E. バッハあるいは J.J. クヴァンツ（1697-1773）によって（少なくとも部分的に）書かれたものだと考えられています。原曲はフルートのための作品です。

C.P.E. バッハは、オーボエのために2曲の協奏曲と、今回演奏されるオーボエと通奏低音のためのト短調のソナタ（Wq.135）を書きました。「通奏低音」とは音楽のベースとなるバス声部で、チェンバロ譜にはバスと和音を示す数字だけが記され、奏者はそれをもとに即興的に演奏します。本公演ではこのほかに J.B. プラと F.ドヴィエヌが通奏低音による作品です。

スペインの作曲家は、カタルーニャ地方で生まれ、リスボンで活躍した J.B. プラ（1720-1773）と、セビリア生まれの M. ブラスコ・デ・ネブラ（1750-1784）です。プラは高名なオーボエ奏者で、オーボエのための協奏曲や室内楽作品を数多く残しました（なかには弟ホセ・プラとの共作もあります）。なかなか演奏される機会の少ないプラの作品からは、変ロ長調のソナタを選びました。

ブラスコ・デ・ネブラは《6つのソナタ》op.1（1780年出版）において、スペインでは初めて出版譜に「ピアノのために = para fuerte-piano」と記しました。ピアノ独奏の曲で、本公演では op.1 の作品集の最後のホ長調のソナタを演奏します。歌と踊りの対比のようにゆっくりな第1楽章と速いテンポの第2楽章から構成されています。

「フランスのモーツァルト」、とも呼ばれる F.ドヴィエヌ（1759-1803）は、パリ音楽院のフルートの教授も務めた作曲家です。フルートはもちろん、オーボエ

やファゴットなど管楽器のために膨大な作品を残し、ニ短調のソナタを含む《オーボエと通奏低音のための3つのソナタ》op.71は、1798年にパリで出版されました。

J. ヴィダーケア（1759-1823）は、パリでチェリストとしても活躍した作曲家で、1817年に出版されたヴァイオリンまたはオーボエとピアノのための二重奏曲集は、彼の代表作です。今回演奏されるホ短調の第1番は、ベートーヴェンを彷彿とさせる激情が感じられる作品です。

モダン楽器と古楽器が上野の森でどのような出会いを果たすでしょうか。どうぞお楽しみください。